

無形文化財  
【工芸技術】

や え やまじょう ふ  
八重山上布

指定年月日／1978（昭和 53）年 4 月 1 日  
保 持 団 体／八重山上布保存会



八重山上布とは、苧麻<sup>ちよま</sup>という植物から採った糸と植物染料を使って織り上げた八重山伝統の織物である。その起源は明らかではないが、『李朝実録』によると、1477年に与那国島に漂着した朝鮮人の記録に苧麻で織られた布があったという。1637年から始まり1902（明治 35）年まで続いた人頭税制下において、布は税の対象とされ、糸の密度により上布、中布、下布、下下布の4段階に区分された。特に上布は役人の厳しい監

督下で、技術的にも高い水準に達していたといわれる。

人頭税廃止以降、大正時代に入ると八重山上布は産業化した。従来、地機<sup>じぼた</sup>と呼ばれる織機で織られていた上布は、八重山式高機<sup>たかばた</sup>という織機に改良され、「捺染<sup>なつせん</sup>」による上布の量産が一気にすすんだ。捺染とは、紅露（ソメモノイモ）の濃縮液を糸にすり込み、緋模様を染める技法である。その一方、人頭税下で貢納布として織られていた、緋模様を作るために糸を括って染める「括り染め」技法による上布は、量産が難しく織る人がいなくなっていた。しかし、1973（昭和 48）年に新垣幸子氏により括り染めによる上布が織り始められ、その後、八重山博物館の復元事業により、括り染めの技術がよみがえった。

県指定

無形文化財  
【舞 踊】

や え やま でん どう ぶ よう  
八重山伝統舞踊

指定年月日／2004（平成 16）年 5 月 14 日  
保 持 者／森田吉子、山森喜代子、本盛秀、宇根由基子



八重山伝統舞踊は、豊年祭や結願祭などの儀礼の場で、神々に奉納される祭祀芸能が母胎となって舞台芸能になったものである。素朴な所作が基本で、旋律と詩句の美しい歌にのせ、緩やかなテンポで踊られる。

八重山では近世以降、琉球王府との交渉が盛んになるにつれ、島外からもたらされる芸能文化の影響を受けるようになった。とりわけ、八重山に派遣された王府役人たちとの交流の中で、八重山在来の古謡を三線にのせ、それに振りをつけて、祭祀の場などで踊られるようになった。八重山伝統舞踊は、「ウガミディー（拝み手）」「カミディー（戴き手）」などの所作や腰使いに特徴があり、「赤馬節」や「古見の浦節」にみられるような独自の演目をもつ。近代以降は、舞台化が進むとともに八重山の人々の美意識にあう形へ洗練され、今日まで継承されてきた。

現在は八重山地域のみならず、県内外においても広く愛好されており、鑑賞する機会も多く、沖縄伝統舞踊とともに沖縄芸能史上重要な位置を占める舞踊である。